

代官所で、えらいお代官さまは（今日風にいえば）印鑑を捺すのが主な仕事で、よほどの事がなければ新聞を読み、お茶など飲んでいたのではないでしょうか。地元の人分りから雇われた下役や、物書き（書記）などが、実務のほとんどを処理していたでしょう。

寛政年間（一七九五頃）に物書きを勤めていた小川孫兵衛は優れた人でした。代官所に伝わる諸帳簿類を整理し、またそれ以前の分については古記録などもひも解いて、『大槌官職記』『大槌御用留

拔書』の二巻を、われわれ後世の者らのために編集し遺してくれたのです。『一拔書』は残念ながら発見されておりませんが、『一官職記』の方は様々に活用されて、『大槌町史』『釜石市誌』なども主要部分をこれによって記述していると言っても過言ではありません。

右は高三千石にて平田村より豊間根村まで知行なり」

ところが、ほとんど同文の「大槌古館城主大槌孫八郎殿、高三千石にて平田村より豊間根村まで御知行なされ候」

と記された「古記録」が存在するのです。これは小川孫兵衛の寛政年間から数えて八十五年程以前の宝永・正徳年間（一七一〇頃）に、地元の人分りによって編まれたと考えられる「古記録」です。小川孫兵衛は、これを引用したに

記』によると、大槌氏の知行は、平田村より豊間根村までの間で高三千石としてある」

これは「岩手県史」の記述です。『大槌町史』もまた次のように記しています。

「大槌領三千石は遠野・釜石方面の兵乱終了後に南部氏より孫八郎の知行地として与えられたものであろう。その地域及び知行高は江戸時代中頃の大槌代官所管下二十三カ村の総石高三千一百石余に匹敵しており」

# 大槌の歴史

## 大槌氏をめぐって 第6回

ちがいません



小川孫兵衛の墓（江岸寺境内にあり）

「（大槌孫八郎の）その勢力の豪勢さが察知されよう。根城八戸氏や花巻城北氏や浄法寺氏と比肩される大

「官職記」は、その冒頭部分で大槌氏に触れています。「大槌古館城主大槌孫八郎政貞、

勢力であり、大槌氏は元来三千石を領知していたと称されているのも首肯されよう。「大槌古館城内

しかし、いま冷静に各史料を点検してみますと、「大槌氏三千石」説の根拠は、小川孫兵衛も引用したかの「古記録」が一冊あるのみなのです。これは先にも記したように地元の学識者が記し遺したものと考えられます。当時はコピーする機械などないものですから、そのご研究者やら好事家などが借覽書写し、その写本がまた書写され、その間に誤読・誤写があったり、各人の識見によって若干手を加えられる部分がでてきたりしな

がらも、今日までにほとんど同内容の数冊の本が遺されました。すなわち町内金沢の飛田氏所蔵『大槌古館由来記』、安渡の越田リワ氏所蔵『大槌古城物語』、末広町の菊池清郎氏所蔵『大槌古館之領主孫八郎殿事』、県立図書館所蔵『大槌古館城内記』などがそれです（以下一括して「古記録」という）。一冊の原本から派生したこれら類本と、そしてこれを引用した小川孫兵衛の『大槌官職記』とその類本とのみが、「大槌氏三千石」説の根拠となっているのです。

では出所が一つであるこれら類本以外では、大槌氏の石高はどのように記録されているかを整理してみましよう。

天正十九年（一五九一）八百石  
九戸の乱に出陣のとき  
慶長三年（一五九八）八百石  
「御家中身帯並堅目人数」帳  
慶長六年（一六〇一）八百石  
岩崎合戦に出陣のとき  
そして慶長十七年（一六二二）には、大槌氏は実権を失って、南部氏の臣浜田氏が大槌に入ってから年貢関係をはじめ諸事を取り仕切っているのです。つまり、天正十九年以前から八百石であった大槌氏が、慶長六年以後同十七年頃までの十年間ほどのうちに、急に三千石の大身になり得たとするのが「一三千石」説なのです。

さらに「内史略」といふ本では、大槌氏滅亡に関して「寛永六年（一六二九）大槌孫八郎 閉伊郡大槌居住、八百石」と記しています。寛永六年滅亡としていることには疑問がありますが、いずれこの本の著者は、大槌氏は滅亡時にも八百石であったと認識しているわけです。

筆者がこれまで用いてきた諸史料にしても、ほとんどが江戸時代に記されたもので、厳密にはその一つ一つの信憑性について批判・点検されねばならない筈です。今それはしばらく措くとしても、「大槌氏三千石」説の唯一の根拠である「古記録」についてだけは検討しておかなければなりません。

「古記録」では、大槌孫八郎は高三千石にて平田村から豊間根村まで知行していたとしたあと、「慶長年中の頃、南部山城守様のお供にて江戸へお登り候」と記しています。ところが南部山城守重直は、慶長十一年の生れであって、ここはその父南部信濃守利直でなければならぬのです。「古記録」の類本はどれもが、山城守と大槌氏の関わりをこの他にも記述しており、それらが「古記録」の原本からあった誤りであることを示唆しているのです。

文・町文化財保護審議会委員  
花石公夫さん